

かけ橋

まだ見ぬ君へ...

市内五貫島の「デポ103」というギャラリーで、九月六日から十八日まで、富士芸術クラブによる企画展「色仕掛—そそるものこそそられるもの之間」が開催されました。

今回は、市内の至るところで芸術活動を展開している富士芸術クラブを紹介します。

富士芸術クラブ

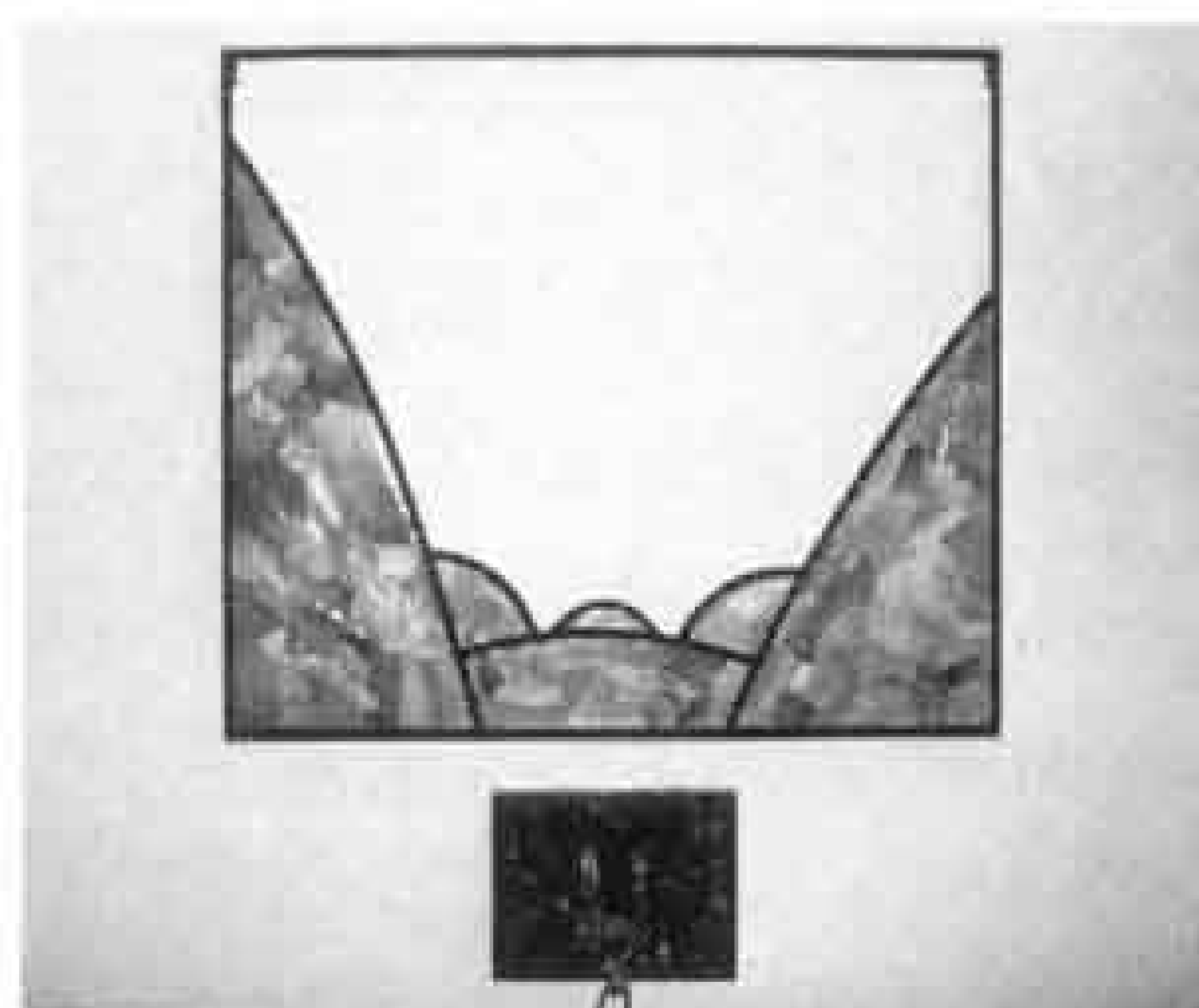
富士芸術クラブは、平成三年に結成されました。そのきっかけは、平成二年九月十五日に富士市内の芸術家が集まり、開催された一つのイベントでした。

その名は「アート・ピクニック」。富士川河口東側の砂浜を舞台に、流木や石、廃品など、そこにある物と空間を自由に使って「創造力を遊ばせてみよう」と、常識にとらわれない芸術を表現したものでした。

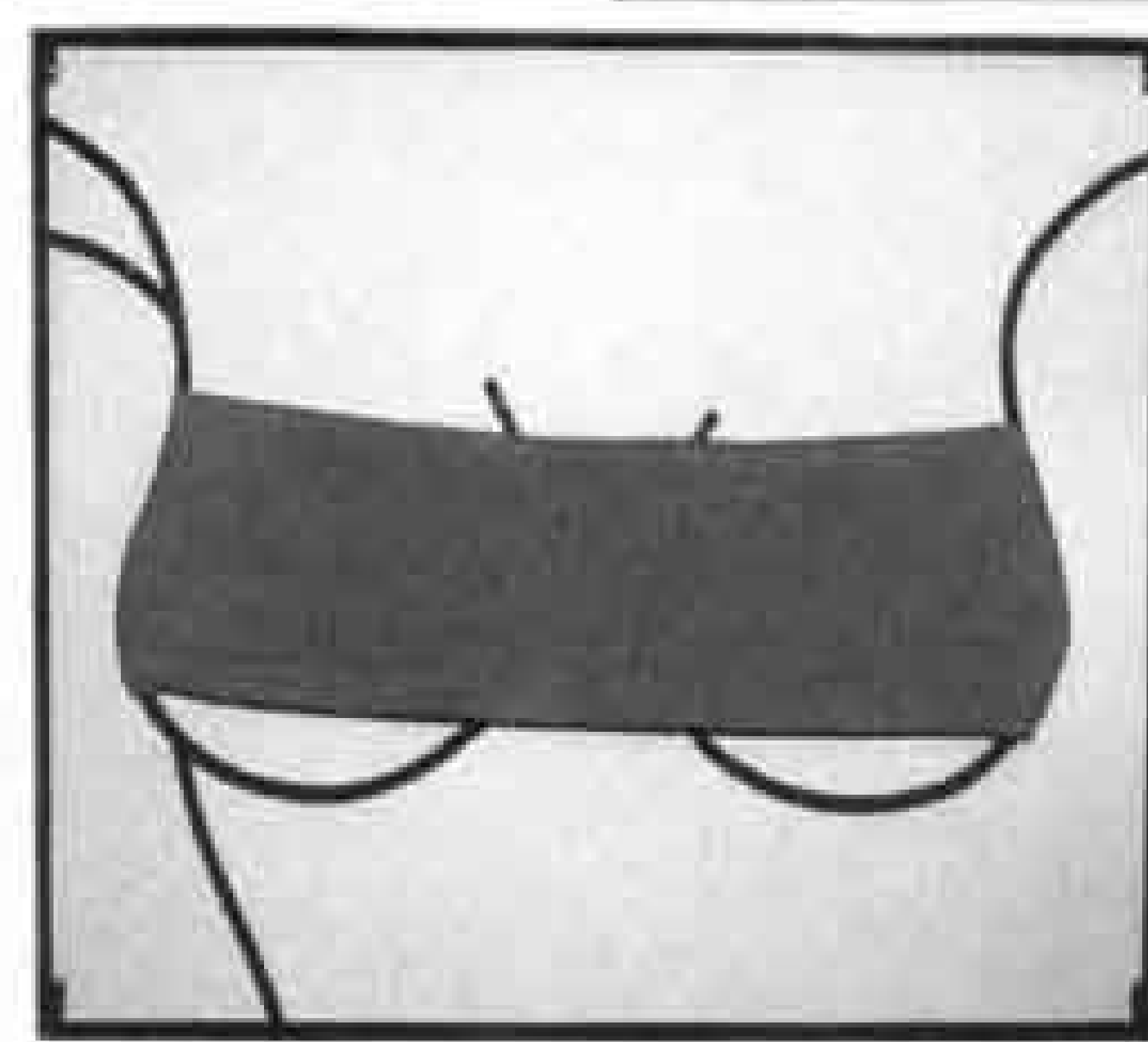
それ以後、「アート・ピクニック」は毎年九月十五日に開催されています。



▷富士芸術クラブによる企画展「色仕掛—そそるものこそそられるもの之間」



△富士芸術クラブメンバーの作品



ですが、このイベントを一日だけのものとせず、定期的に芸術発表の場を設けたいとの参加者の思いが集結し、富士芸術クラブが生まれたのです。

富士芸術クラブのメンバーは、現在十六人。年齢は二十歳代から五十歳代以上と広範囲にわたり、ガラス工芸家や美術の教師、デザイナーなど多種多様なメンバーで構成されています。

富士芸術クラブのメンバーの一人、鳥居厚夫さんは、

「富士芸術クラブでは、絵画や彫刻など、既存のジャンル・分野にこだわらない自由な発想で、芸術というものを考えています。

現在、イタリアで展覧会を開く計画があります。これからは、富士市から外へ向けて発信していきたいですね。国際友好・姉妹都市の嘉興市やオーシャンサイド市などでも展覧会を開いて、芸術を通しての国際交流ができればいいと思います」と、海外へも活動の場を広げつつある富士芸術クラブの、未来へかける夢を語ってくれました。



「墨に五彩あり」
広見荘で墨絵を教える

まさたろう
芦川政太郎さん
(富士岡)

子 供のころから習字が好きで、墨と筆には昔から慣れ親しんでいた芦川さんが、広見荘の墨絵教室の門をたたいたのは今から七年前。年賀状と掛け軸が、墨絵を始めたきっかけでした。

芦川さんは、毎年、自筆で何百枚もの年賀状を書いていました。あるところから紋切り型の決まりきった文章だけでなく、絵なども添えてみたいなど、感じ始めました。また、掛け軸が好きだった芦川さん。最初は見るだけだったのが、掛け軸の中の書画も自分の作品にしたいと思うようになったのです。

目 標を持って墨絵を始めただけあって、芦川さんの腕の上達には目覚ましいものがあったようです。何と始めてから二年後の平成二年には、病弱だった先生の代理で、時々ほかの生徒に墨絵を教えるまでになりました。

そして平成六年四月、芦川さんは正式に、墨絵教室と、墨絵教室のOBで結成されている墨絵クラ

五 彩とは、「墨に五彩あり」という言葉から引用されたもので、墨絵をかくときの墨の濃淡をあらわしています。墨絵は墨の濃淡だけで、さまざまなものに彩りを与えます。芦川さんが教える墨絵は、一筆の筆先が基本。筆先から生まれる墨の濃淡に生命が宿ります。

「私は、生徒の皆さんに作品を発表する場を数多く与えるよう心がけています。そして『創作』すること、つまり独自の作品をつくること、のどいご味を味わってほしいですね。

生徒さんが墨絵を通して生き生きとした姿を見せてくれることが、私にとっても生きがいになっています。今は、私の人生の中で一番充実していますよ。」芦川さんはひとみを輝かせながら、こう語ってくれました。

